奥の細道

911.3
オ
上

秘蔵

そもそもこれ法の源をあらはし祖師の
元源をむかへ玄学をたづねきわめ
仏道を踏分て道を井に記りハ法門の
本末を尋ねて風士行をるふるを風史
拾遺の書也聊異なるをたのしそのあ
遺漏を補ふ所に源を顕て世に伝ふ
ものなり有れば有れば可庶幾也 三十四の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

輿地志略 巻上 湖月栖條 著述

菊行御小江戸と立出る小

芭蕉翁分左右小草鞋之ゆゑ　季下

月ゆゑ弘法酒乃乞食　菊

竿法ふとゝふ白と和ゝ

病まいゝ世ん西行ゆゑハ秋の暮　雷枝（イセ山田）

ゝ世紙と養ふ風乃破笠　菊

花の咲かうと草は菊うゑ　山田　拐遥

妹うゑ花うゑ塚の名和尚　菊

菊植えて結びとうゑ

師の樹むう拾ひ人木の葉ふ　ミノ大垣　嗒山

落て雨乃鼓四十一　菊

雨を紀結藤よ墻を高せ中次　如行

古人うゑうふ表の木うゑ　菊

我もさひよ雪より奥の藪梅　イカ　雅良

茶の湯よ跡る雪のむよ香　菊

京鳴滝

茶ら櫂船刈枇杷の廣茶ふ　秋風

貧ら動く山虎は茶　菊

梅をうく日永一樹今歳日　湖春

東乃念の垂素年ふく　菊

夏菊よ水晶ほどの五三日　若照
笠もてきやを庭の卯の花　翁

画讃

赤人も今一入の酒機嫌　大ツ　珍碩
土器ムさぶる家の振舞　翁

翁の御のぼりたるを
よはしてそ

京

天せきやふ茄子をちさる形の烟　惟然
そをふ茂笠ゝ形ゝ人々貞　翁

ゆゝしくや蕎麦ふの頃乃菊艸　十九三　如風
赤土ハ菊やゝ形を書　翁

笑蕎麦ふ茶ゝ色ゝ袖も濡るゝひす　十コヤ　荷兮
旅寝ハ雨を天ゝるあるゝと　翁

江戸

秋の今ゝ引さ紀くゝを笠蕎麦ふ　木因
菊千株やゝゝ形よ森ゝふ　翁

ゝるゝくゝて天せきやゝ蕎麦ふ西挿唄　三ノ　巴百

笠あらしの雲不破の関　翁

蕎麦や麦乃中行あ弐者　未道（ヲヽミ）

のらゑふいけむ志れ糸に　翁

いのちくてさ者る海行ぬ分ふ　猿雉（イカ）

霍の匂ひわ乃栗ゝ種　翁

咲白てや花まく残る桂笠　大阪（ヤ）

有ものゝ蝶ゝ残ゝ若葉　翁

菜種干さ遠のさ〻や夕涼ミ　曲水（カ）

巻き込ゝ出ゝ乃ゝ芋　翁

興ゝ覚ゝ乃なくて冬木の枝ゝ乃　霞川（ナコヤ）

小春ゝ日首乃動く蓑むし　翁

蕉の新ゝ乃ゝ芽ゝ志ゝ孫ゝ　荷兮（ナコヤ）

杉てや掃ん庭ゝ乃ゝ苔ゝ木　翁

和ゝ乃ゝ芋ゝ乃ゝ芋ゝ乃ゝ手作変　如舟（スルカ）

田植をすまふ猿の朝起　翁

芽出しより二葉ふる枝の夏　丈艸（ヲハリ）

畠乃菜のうゝ花の花　翁

為奥陸くだりと我が茅屋
庵松青伝を尚示川乃
河辺を次川をを下り
泊佐をを中遠りぬ

為時をく栗乃赤さく孫乞乃　桃雲

いつきの艸子峠出る蟬　等躬

夕食の餓ゝ乃面示月出を　大垂伝

秋事をりをく布為をかり　曽良

○

高久亭にて

猿蓑の苗代時の世を忘る　曽良

けさこの乃堤の中や先ぶきて　大世俊

夏月の手賀の蓮の葉ごろも　等躬

○

おなじ所におもむく

茨ぶきて遠智の入りかげの牛　等躬

市の子俤ぶきの苫ぶき　曽良

日暮れ西に笠をなくしぬる涼しさ　大世俊

おなじ所にて

風の香も雨にぬれぬ家ごとに　芭蕉

小家ぶきの苫のふるさと　柳風

そのもとく禁ハ雨ぶく埋れぬ　木端

六月十五日出羽国田川郡
長谷寺にて一句

涼しさや鶴ヘ入る月の上の川　大世俊

自然ゆゑなる涙ぶきぬる　剣直

思暗の発句庵乃名明く　不玉

樹下ハ雨手ゐるめのそきれ　宜連
皮とちの打殺ゆりて市ゆあ　曾良
ひまくまかきる霄乃油火　任曉
ゑ様姫のゑ乃重紀花ゐる　扇風

○酒田伊藤元吟亭ホ却て
江上之晩望

ゆ乃ゐ山や吹濁りきて夕涼ゐ　芭蕉
海松苅磯手奥む帆柱　不玉
月出ハ開屋ゆゐ人酒持ゐ　曾良
ゆゐの電乃ゐゐる秋風　蕉

志ゑ乃ゐゐゐゐ遺ゐる色松　上
ゆゐゐのゐを吹ゐ蓑の毛　良
ウ
香屋ゑ鶏の鶏の冬ゐ来て　蕉
火ゆ梯ゐけゑゑ髪ゐて　玉
海乃ハ道も考紀まて切芋ため　良
松笠送る武隈乃古産　蕉
茅枕拍ゐき悪も志ゐて　玉
彼の神ゐゐの孫ゐと　良
清ゆゐゐゐゐてゐる我も要ゐん　蕉
此世乃きゐゐゐ拍ゐ入　玉

良

行つゝ経書第寺は鐘の声

蕉

[illegible]も命も嶋乃乞食

玉

かゝけるゝ[illegible]菜蔓わて

良

[illegible]乃旭社疫所 [illegible]

玉

二

[illegible]の[illegible]と木蕙と蕾く春の汎

蕉

[illegible]を瀧[illegible]清[illegible]山 雅

良

剛かゝ[illegible]ま[illegible]たゝ笹[illegible]

玉

榕[illegible]ゝ[illegible]塚乃[illegible]

蕉

秋霧ゝ[illegible]紀岩を精[illegible]

良

恵[illegible]次代衣を遥[illegible]

玉

明日志めんてを俵[illegible]生[illegible]

蕉

月さゝ清き陳中乃市

良

清樂ハ志蕾ゝ奥とかゝ[illegible]

下

小独稀代送ゝ戒乃師

荘

我ゝ本の毋ゝ仏ゝゝ床くく

良

[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]家ハ貴れても

十

玉

[illegible]良ゝ京持[illegible]ひゝ古ゝ集

蕉

花小蕾を切ゝ坊の酒蔵

良

[illegible]巣[illegible]たゝ神ゝ[illegible]

玉

[illegible]種ゝ[illegible]ゝ第ゝ[illegible]

錦木を化して古き恋をうん　蕉
ゝとるふ色をたのむ客達　良

○世話大石四ゝて無り

五月雨やあつ巻て涼し宮上川　芭蕉
岸ゝ[illegible]繋舟杭　一榮
瓜畠いさるふ色ゝ月をゝて　曽良
里乃むゝ水葉乃細石　川水
朱の子ゝふくさむ夕百蕾　榮
[illegible]懐乃吟　蕉

水
良
蕉
榮
良
水
蕉
水
良

僧笠を枕ゝ[illegible]
雲ひゝゝ[illegible]四ゝ境目
永ゝの古ふ地獄をいさきて
夢少合ゝふ大鷹の残
蕉の色紙咲ゝかゝ地き
瓜ゝ[illegible]ふ響ゝ乃石
拂ゝ[illegible]ゝ思ゝ這入
痛ふ人ゝ昔新風
月帯河井ゝの月ゝ和ゝ
砧ゝゝゝ[illegible]

栄

水

蕉

良

水

栄

良

蕉

栄

水

蕉

良

水

栄

蕉

良

水

栄

蕉

良

おなじ江亭にて
極吟なり

孫しや山賊を生ずる初茄子　翁
蟬子車の音ばかりを聞く　重行
絡織の蕾いそうを援ける　曾良
国孫生ずるを待て三ヶ月　呂九
香ゆ新小菊りかりを言梨の花　行
結ぶ朝蝶心付しを盡　翁

山の端よ清くこそ月帳無舟　九
蔡なる里を心ゆく次　良
栗稗をは毎の飯よ喰飽て　翁
弓はかり試ふ石乃戸　行
赤樫は世毋は記念を植置を　良
雀よ泊を小田乃苅　初　九
氏蝶も門の板橋踏を今雪　行
敲発ふ濃く霧ふ月　孫
きぬぐいは東ゑも同しもの徒　九
宿乃女ふ拡堂をものう弟　良

焼入の花ゑぶ馬に寄る　行
元乃廓を細手　焼々沢　丸
二重組は美少を歩に設る　箱
奈良の都ゑ　ふ始ぶ　行
山吉に先ゆくれとや答なて　良
森を分ふ化粧美し　蕉
遠々ふ見法ふ沢鉄砲舟　丸
ふ九くに友成ふ　良
千日の尾船むさふ小松り　行
紅葉のふ船法ふ書　丸

夕八城のあふて夢や見ぶん　箱
志ふく森々ふ女命ふ　行
ぶふ川舟を行脚の京に見く　良
温泉かふ陸奥は秋風　箱
十ふ丁のふふ男ふふのふ　丸
山ふ分作ふ色の蓑　良
尾衣男小海ふ小一命　行
いかふ面ふ変はふ稽　丸
花の時ふふ変ふ好ふ鳥　箱
鶯ふ四ふ書乃山　良

新庄よりかへる道中にて

[illegible]　風流

[illegible]　芭蕉

[illegible]　孤松

[illegible]　曽良

[illegible]　柳風

[illegible]

[illegible]　蕉

[illegible]　流

[illegible]　良

[illegible]　如柳

[illegible]　木端

[illegible]　風

[illegible]　柳

[illegible]　蕉

[illegible]　松

[illegible]　端

蕉良
陽光隠る庭苔乃雲
乗ると業俗捨世る者出水流
果なき悪不長丈月代端
袖香炉乃ちの八系に立て風
牡丹社乗風布のの為り柳
去僧のいく小蛍ちめん出蕉
武士みく見入東西乃門良
おのきく鹿七鳴ける奥社原端
羽織下清む草指の身流

蕉柳
蛍ちく捨ちにかさん花社笠
ちく花を面ける美陽ら若合
系ちる門出紙ら夕日暮風
清水の稚よ足ゆる篇出端
奉社佐御社霜七踊ちて蕉
ちかまて京紙孫宜の出紙流
ちらく一石のかれよ船ら風
ちる山七羽乃清まく柳
咲雨社花紙たよ袖ちきて端
鶯叫ら朔踊舞ふ宿良

四月山本坊にて興行

名月や雪ふりつもる南谷　芭蕉

さむしろ敷て人ぞ待ける小夜の月　露丸

川舟の綱手曳引たるる　曽良

格子戸ぬるるあるじ舟　釣雪

澄み切て天のうるこの時乃月　珠梅

北に東に良うれ来る秋　梨月

居眠りして盃の日陰を追ふて　雪

京里は猶ほ未だ牛迷ひ　蕉

山を出て山を見ぬ峠の紅葉哉　丸

爺持たく世を神木乃恵　良

歌よりの紅葉ちるべき宿ちて　雪

立うるあれ歌を何ちの恵　丸

古御所跡寺ちるる桂は菁　蕉

糸ゆふ柳枝はまくさ萩　水

舟足ちを引紀されて眠しかな　良

繋ぎ舟ちちちちちちの秋　蕉

九
雪
蕉
九
円
入
良
九
蕉
水
九

二

入
良
水
蕉
雪
良
水
九
雪
良
水
蕉
良
水

餘興

高き山の峰に紅葉の錦 峰の雪 本坊會覽

扶の花きみをかつらの月 たゝぬ

弦かけの弓に矢を番へ猛き初霜 不玉

まくらもとれば紙衾 不白

もくもくと名殘の家のもしうれん 釣雪

偏も志ゝ紙子 ヲ

笠島に紙子よりも先に馬かりて 巴百

入日のうちやく萩乃えんの末 玉

思ふらの米に載く雲形米 〃

姫ちふまちて孫に渡くらふ 百

待宵小枕香炉のかゝ先さて 〃

横川より角はちふ中ぢう 玉

降出す傘小ぢ不笑ぬ秋刀魚 〃

八朔を矛懐出す 百

薄雨ちの下小雪謡をきゝ出て 〃

皆しも繁物を出す立形 玉

百玉
如行
支考
行
考
行
考
行
考

行
考
行
考
行
考
行
考

越後国高田の医師
細川素庵亭にて興行

茶園をかつぎ乃茶を叫ぶ　枝　翁

萩はなを花瓶にうつす舟　揀雪

炉をむすびのタアル秋のふぜい　吏也

雪系はきて言葉乃下　曾良

[illegible]一杯よりて
さまをいろく

加賀国北枝亭ニ御とまりて
名殘乃餞吟興

馬ひきて乙多退行ふれ夫な　北枝

花ぜ乱ふ山乃姿ふ国　曾良

月よりぜお様ふ袴ふみ之ふ　北枝

鞘ふ[illegible]ふ[illegible]ふ世のて面ふり　枝

ふ湖ふ鶴ふ[illegible]ふ世ふの書　良

紫苑ふの[illegible]ふ峯ふ世ふち　蕉

ウ 殿ばらたち山を菅の寺　枝
初め四人田舎わらひ　良
房出に悪しき君はなしあて　蕉
髮を剃りまと魚食ぬ時　枝
蓮はいとさらしきく罪ふく　良
先祖の貴を傳く学門　蕉
を時の祭乃上座をうをうり　枝
嘉時川掛猟の弓井　良
秋風を木の云ぬるに涸ふく　蕉
ふを枝乃ばく色菊袖　枝

花の番ハ古よ郡乃所作り　良
妻を殘さるか云仍乃笞　蕉
長雨さ知ちく雅波の貝尽し　枝
銀の小鍋紙出す芹焼　良
を枕よちねの埃をうち掛ひ　蕉
美しいまを歌く霞　枝
ばを小袖薫賣り古風ちり　蕉
非蔵人なる人ぬ菜鍋　良
時ぬとり巻にまて水洗ばよ　枝
春ばばくふこ月のさ句

和歌山草の松よ浦すして　蕉

小島しをし伊勢乃海風　〃

疱瘡を葉名日永し流行色　枝

面晴男を抱把ひとりあり　〃

十郎ちよ仙女は美をやふ　蕉

菌紙去かふ行ひとをを　〃

仲縁の字治の細代とも孫　枝

寺〻使紙去紙に工　〃

徒捕てひとをんを志の蔦りを　蕉

破ひて海を芝切　執筆

加賀白雪澤を奥り

如をく行人も却〻紅面の萩　芭蕉

去ゝを源〻落ふく赤　亭子

月又ゝと猟ゝも舟ひを　曽良

ゝを帳ゝを待うねゝをり　北枝

松の風蔦紅乃笠ゆらいをんぬ　工蟾

響ゝ和ゝく雪の玉と弾　志格

ゆかりなる湯本の峯も遥かに　斧ト
下戸に招きまく主は酒掘　唐生
紫は吉ふ縁を尋ねきれより　李邑
道の地蔵よ拝りまや　祝二
唄達り爲乃声も峠より　夕市
家伝ふむ宰嚊乃舟　蕉
肌の衣女乃加ちりて降りる　格
多盆踊ふく我ら注　嶮
まりうふ赤より呼ぶ塚の声　枝
雷よ新塔乃如をうり　良

世中往来竹乃柱も三四本　子
新霧清る拝は紺　邑
我を来ふ雲小八声の聖笑家　市
むりを吉ふ月の清凌　卜
ちりかふ花よ来橋里を　生
雛ある翁道為き新　主

支考遠樵の志ひらこと小遠る

小川乃翠よ足あとをいのはりら　甚角

文保に幸末年に月

見小杉俳別乃拾を俳表

仮能の能ものりよ部うる　雲角

をの出貸て国角志ま沢　支考

和ふ寂独も堂るまぬ奥涼小　挑隣

行に所りる杉乃春に　角

月乃表庭よ西風をるく蛍　考

角力を鶴まを村せ行葉　隣

所くの秋通を歌を軽むかりら　角

本名考ぬ伝借ぬ友丶

蕣撰も人ぬ上るる房り御　隣

三度しをほふ江戸橋の藝　角

ぬやくをあのむうりせ石尾　考

さやりをいりる角む友豆　隣

蘇りたて病事せかりりら　角

女客よ考内り春ぬ歯　考

照月小孫宜の化務のくハさ　隣

彩羅せ使舟流家事　角

弱為の手舟ふなの枕引きす　考
長吹け張るハ山紙幣　扶　隣
五条十二　行るるもけ妻の風　角
産飯とふうち俗合せうり　考
髮抜を掛捨たふ　蕪　遠　隣
洗濯のある紙衣とふふ　角
傾城を娘くたたるむもうす　考
洞ふたつむ寄れ立　牽　隣
盗るもはくたるむ為の舟　角
をやの廉け書く拾ハせ　考

蓮の実ハ佛のふし　猴ちうん　隣
形ふふ扱ふ　鍋のおしふ　角
伊勢糸より懸一たりにうぬて　考
ふりはさ魚行いやしき　隣
戸扉やけしく実ちる鍋の尾　角
ふふ為ぬ作土の掛とり　隣
撰集抄行御の狂をふくさて　考
肉の志ゆるを女儀ぬ一德　角
花紙る初のふ乃実しを　隣
歳号伐ちふふ家河の妻　考

野盤子

行雲は碎くく流し磯乃心　文考
ふるさと雨ふり　明家　古鳥　重行
小麦苅行の中に青やきく　呂九
傘きて本小四五人出家　考
月遥〳〵羽織の上乃きくの帯　行
熟柿の落くきれひちる　九

ウ

秀吟面賀名む俳りの結書し　考
結ふの中きれきを文きくくら髪　行
獨蘇の姉参くまくくりくな　九
猫出通ひと明紅かくかみ　考
振穀は白ひお野小吹きりて　行
仲乃くくより隆り寄きる面　九
食仕舞ふ味噌の名し捨くれき　考
先ふくなふ撥の織出し　行
門前の陳をいまくく宝函を　九
月ふ雲紅紅紅てりは活　考

行
九
考
行
九
考
行
九
考
行
九
考
行

九
考
行
九
考
行
九
考
行
九

二

十

夏の夕や一息よ欲涼の味　幽通　玉
萩面を包むの骨付き　不玉　九
ほ小袖の紙カラ結ぶく　呂九　撤
緑髪子供小任勢る秋　不撤　文
出産後の後ハ産を月の彩　玉文　考
雲乃志めり小盥うれむけ　支考

雅子堂

雅子の這寄る道後行分く　玉
行御の始袋舞ふき　九
懐後新ふ歌く十二銅　撤
鄉貴男子鮮ちりちり　文
奥深き材木町乃新居ふ　考
あれをくく作の昆山門　玉
夕月小毋の茶鞋ハ級解きて　文
縫ふふ孫ふき挿　撤
爲凡枯ふく黄小なる西行ハ　九
獨ち身小乙志まぬ多勇　考

六七月花は虎の皮に黛
夕日のそこの小船哉　ちよ　玉
二
東風海原琉球表彩々しく　文
切ちかく角の小西は舟を言　考
沸まく〳〵るの世りめる本津の舟　九
沸俗乃鉢を小堅して来る　撤
細長紀張帳小面の漏出して　玉
よものやゝ粧むうゝきの巻　九
味噌豆を積ふ作はれ初おもひ　考
ゝふの伸小かゝるゝれし　文
撤

心茶花のうゝ紀色に富ふて　玉
寧府やいふゝいつてゝるゝん　九
後の立秋若ふゝゝむ青の月　考
瞽女の紅よ世秋の法ゝ　文
十
蔕栗の本は茶のこをまゝるゝて　撤
風ゝ　吟ゝゝ　蛇　衣　玉
ゝふ鍬ゝゝ切ゝむ舟の中　九
筒御板ふゝゝゝる法師笛　考
横ゝは帝ふ花の咲のゝゝ　文
ゝよ紀立ゝる蔵虎校竹　撤

河豚ふくと云るなのふくるふ　不玉

火桶の縁掛ちかしとり　偽通

目小あるあぬ垣ゆの菊と撥ちるく

月てりかりるくこの九月行

ちちちちちつる側へハあるる秋の夜

生本ちりりえゆる重陽　玉

廿カ田

雨漏ぬ稽のりり梦節ゆれ

濡ち拾し　大年乃菅

秋明魚の鮒よ答意出羽の布

中るるふるの屋つまちる形　通

夕魚のいろ咲ても奥ふるる

原てしふるおもるねハ　玉

茶鴨のるるゆるも稽うめく

魚比須我形新寒乃仏　通

舟数くくち秋ハ尺て作ちの月

亂の杉よくあ菊のく　玉

猫しろく蚤遣ふ春さかり　通

かひてうの音正月の猫　通

二　嘗の時ハ法華の御ようの夜　玉

毋は姿の夕ゑ也　嫁　玉

俵切の垣寄る時ハ猫　通

里は猫を力さす人　通

嫁まく登る間ハ茶やもぶ　玉

ものゝ彩り美哉　猫　玉

三ケ月ハ男世帯のはけるくて　通

一茶もまくとたるのま酒　通

萩咲くは垣の年は寄くと　玉

ときまて家し西行の枝　玉

有疑や津恒の舎利を拝む時　通

十　所を出る　嫌　所の私　通

結　鶴　時　乃　見の別　玉

ものゝ　法門の叔は　通

ものの　法　音のおうしき　通

ゆゝ　元を　家　ものゝ　花の　玉

ものゝ　雪の　玉

初雪紙 ふかえ付き 産婦 産婦 清風
有明 きぬぎぬ 芸州のうち 支考
警の唱 篭出 掛子 さしてさして 不玉
紙漉町 ハ 薄しうもうり 風
さしてさ 街漉 小 紙造 ちり 考
家吹通 出風の涼しき 玉

尾花沢

少 俳 ゆ あて十 綱の 搗 小 紙 ふみて 風
色糸 白き 片 問 乃 髪 考
大小の ふを とむ 蕎 月 玉
七夕 夜 を 意 の 寂 梨 風
玉章 を 襟 より 現 く 出 山 考
白 紙 汚 ん ん ふ し 玉
行 ぬ 身 の 所 ハ 結 せ よ 香 新 心 風
ふ 出 ふ く 面 の 降 つ 考
川中 小 千 貴 ふ ハ 石 車 玉
江戸 ハ 発 句 出 蕉 代 家 ふ 風

笑ふ事ありて晩方は茶漬ばかり
小倉の餅を帰りがけ
傾城乃舟をかりてゐるおろろ月　考
おやま蓮は知らかるべん　玉
紅粉細の筋を盛とかりかり　風
注連冠をとゝ先ぬ算は屋　玉
いとこ者伏ゐむ是は実に伝れて　風
のゝ是ぬ中に世ふ居風呂　考
碁浄ひ所を之の古日ゐやうゐり　玉
名ゐ事より掃おろす換　風
考

人お律義に縁と密ゐ色　玉
ゐたれたゐ奥の浄瑠璃　風
水蓮の義ゐ之是先ぬ変は而　考
かき名伝若ひ所ゐ之ゐ是　玉
衣くは意とはみり涙くく舟　風
海馬ゐやのおやゐ不寿る　考
花の意意先の寺は七不思義　玉
意合ゐくは答人ゐのまる茶　風
行事をおゆゝを之毋の縁ゐは夢　考
栗玉の落ゐ雀花まり　玉

秋立てて風寒き雨寒の分　及肩
菱花ふまへて戸閉さるる月　珍頑
早稲菓を生り仕出し用意の　之道
人々を寄せの放下師　昌房
猫柳のさやしくえゆる田舎橋　正秀
かまはぬふれ出るの風　抑志

ウ
畚さけて舟のこけを捨ふん　頑
たきぎ注の袋も寒さに　道
居ふふ雑炊時の夕月屋　房
祇明打ち振る中戎　秀
掛て拭く合羽は早き出生　道
肌寒しふ博奕の負　頑
月の前酒ふせらきをうけ　秀
菓子前ふりて寺の雇人　志
上洛して鶏盗む向は　房
日和てむきし柔の乾明　肩

年々と緑板ぬらす花蘂の　頃
荷ひたまふ老の入竹　道
二幅　廣き砂川流る雨さよ　志
羽織ぬらす傳奏ちり　肩
行めて朝紀ふ絵ふ五六月　道
茶を休む昼をめ何　菊
毎歌の仕立く足る妖入夜　秀
悪ひさ〳〵出る櫃邪ふ城　房
江戸店と拵く在所の門ま　頃
麦を蒸る書簡のうまきう　道

役引の弓と蒼うせられく　志
青の小雨に黒竹生ふ　肩
ちゝ〳〵圍の伴緑蘆漏る月ふ　秀
ふを告ふ秋の初よ　房
十　ふ細の末絵色はく風乃吉　菊
石地の坂を帰るうや　坊　頃
情はふ毒井の左吐〳〵て　道
歌を絵す素白は湯上　肩
壁の廣き毒〳〵花と植ひらけ　秀
かゝ〳〵ちる毒は四ちの　頃